

新編水滸畫傳

二編

十

21
875
20



875
200

新編水滸画傳卷之貳拾

東武 高井蘭山 謝編

明治三十二年一月

○朱全義とめて宋公明と釋

却説鄆城縣の知縣へ宋江と助け人を只罪と唐牛児を身は負せ
已に日救經人同に又方便とめて唐牛児を赦人とするに料は
張文遠頻りに閻老婆と引て只顧哭に告るる由忽知縣も今は大
法小就て止し瓜分は乃ち下友友三人と宋家村小遊し宋江の父宋太公
及び其次男と宋江と意不味才平とて乃ち一通の文書と与へり
下友友即日遂に宋家村小遊て垂に宋太公が被はぬ。宋太公自是
と迎へ子懸に延待て客座小就し宋太公已に主席に坐し下
友友彼文書と見かしてこれと与ふ宋太公是と見了て云るる宋世

新編水滸画傳卷之二十

け村小居住して農作と業と素代小あつまで先祖の遺業と破び
 唯官しく分とちつて後世と管り不孝の徒より彼向に官に仕へんとせり由志
 我再三これと判りたれ彼毫髪も素が凍と容お已に家と出て縣裡に
 弛往し由志素時高地の友府小彼不孝の事と何既に親子の縁
 と断て別友府より賜りて執憑の文書と今に素の身辺に不持せし素
 と次男宋法と修に農作と務て今日の後世と管り宋に多事水火と
 交に況や家内に往來するところ後彼が面と見たりとこれの彼
 今大罪と犯しりも素が身に干る事と彼必定這根の事と惹出
 親も禍と敷しむる事とわんと料知る由志彼と縁と断て素
 友府より執憑の文書と更並ぬれり列位明く此是と素と素と

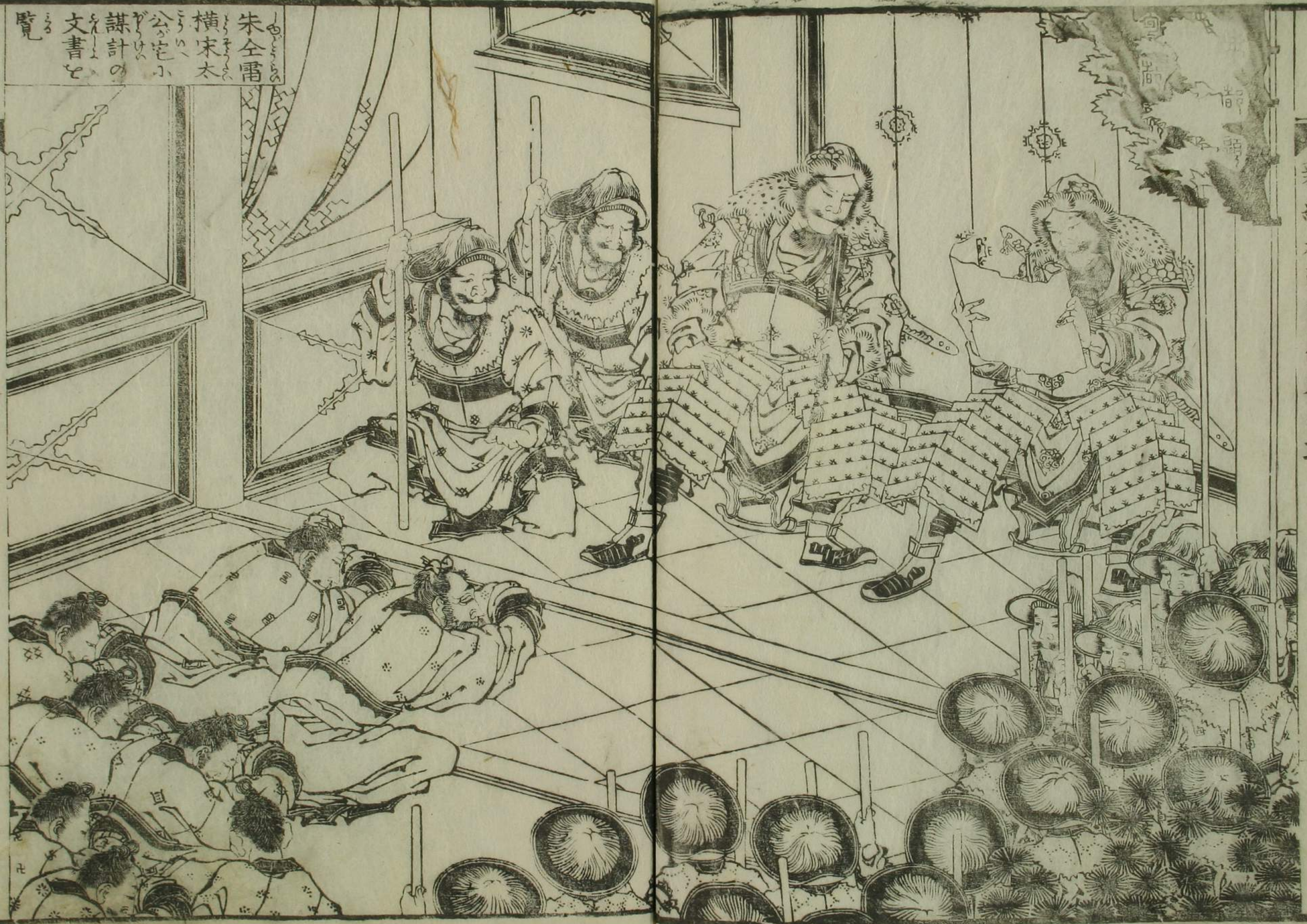
下友亦是とて是別宋の父子が頼りあ計と設けてかくのりひつる
 知れども素未間宋の縁と断りし下友をりて敢て替る事もた
 只赤笑つて云々大公既に親子の縁と断りて友府の文書と成り
 死出て見せし素と是と写抄て知縣相公小見せり也大公別文書と死出
 して下友らに写しめ給て又酒食と使て下友と欺待乃ち白銀十
 余両と死出しく下友あふ送られ下友と交て太公小謝し遂
 別れて縣裡小田り別知縣に見えて云々の宋太公數年以前小宋公
 親子の縁と断りし時友府より執憑の文書と賜りぬ素と已に白
 紙に写して持素せり由志宋太公と捕りて成りし是世間一月の法
 されしかる知縣は言とて私ふ心中小怪ひ既小素友より執憑の
 文書と出し素と云々の宋太公は是別他人されぬを太公干る事と

わに只宮一十貫の賞錢をぬく。近州遠郡と普く觸れおして。宋江と投へしめん。外考をゆふべこも。彼張文遠又周老波を挑咬て再三所征せ。わなれ周老波乃ち改と披髮を孔し頻りに廳前に哭倒れて若る。宋江の明くは是才宋法が働くと云。新ぬれ相公我為に仇を殺してと。公知縣怒て云。宋江の父太公をいびに才の宋法已に數年以前宋江に親族の縁を切て分明に宋友より揚ひし。文書ある上いんぞ能ひ事と。宋公宋法に問んや。汝必ず妾の事とや。ことまね老婆これと。宋法流涕して云。宋江は孝弟第一の人なるに。仍て世間も皆孝義。宋府と譚名せり。豈敢て親子の縁を断とわらんや。彼執憑の文書といふは。必死假の文書。うん只承く。相公明くは。汝乃ち知縣が云。宋友自ら印を押さる公文に。豈假のことわらんや。周波は

と。大いにねひ哭。再三再四知縣小若て。中なるへ人命の事。天下も大いに相公と。孫も。わなれと決り。わなれ。いふせん。我妻ち州程小若て。府尹相公小若へ。我女故あして刃の下に才と喪ひ。死む若り。新太平も。世といふも。仇と眼前に見え。何ぞよく見と。安穩な見え。や。以時張文遠。又廳前に。わなれ。わなれ。知縣相公。彼乃ち仇と捕へ。わなれ。わなれ。州程に赴て。知府相公に。訴へ。中平。知府相公。乃ち彼乃ち前地。お放て。仇人と搜し。出さる。ことわらん。怒く。相公。是れ。河に。あま。凡事。小れ。不起て。大なる。ぬれ。ぬれ。や。是れ。人命の公事。之。只。三思。と。加へ。わなれ。知縣。原。其。理。ある。こと。知。と。い。も。向。小。宋。い。と。ゆ。ん。と。歎。し。聊。事。と。曲。て。支。吾。さん。と。なる。に。今。彼。周。老。波。等。と。張。三。小。再。三。所。ら。れ。對。文。州。裏。に。所。征。せん。と。云。と。心。中。に。や。恐。れ。遂。に。止。

朱全雷
横末太
公宅小
謀計の
文書と
覽

新編大正書傳卷之二十一



新編大正書傳卷之二十一

多ん凡人の命の工に於て其兇身と搜まへ何方をも執例かたじけなく
 太公が云ふ素何ぞ敢て死す所をわらんぞ只隨ふに家内と敢に搜し改て疑
 ひと敢しやされぬ朱全が雷をひた太公をもちて比れに待て必むあり
 に宋太公を放しぬふ我の又一搜し搜し尋んんとて牽ちらに家内を
 しが私に佛堂の示しぬり比れ又二の門を登り実内を懸し下しめんと
 在舞臺きて素舞と供卓と把て例らに搬れ下り又一片の板あり
 掲起して乃比れをさるに二の審あり審の内は一條の終の索あり朱全を
 と把て拽られ終の勢忽ち著て瞬目間もぬに審の内より一人の漢
 子現れ朱全をこれとるに刻宋公明之時に宋公明と敢て見合せ大不
 驚と只呆れと斗ふ朱全が云押司必む我比れ不許り恨んぬ
 らん我を不押司と交り厚に執押司遂不我を放さぬ昔酒の上にて

我小漢の公我親の佛堂の下に二の審あり審の上より一片の板あり一脚の卓を
 着てこれと掩ふは由に家人等も又智者罕く汝が第一の素難あり
 我小初も我被審の内を藏し難と敢えんと若むぬ我を捉て
 ち以宋公明に敢奉経れを於隠々に比れ死す是れより我老早押
 司比れに隠れぬ小漢知れり今日知縣相公雷横と素に命じて押司を捉
 んとの事あるれも實に知縣相公も何とぞ押司を助んとの意最疎し只怒
 らん強と只顧爾老媽と挑唆て再三知縣相公不許し相公を
 宋江と搜し捉へるは比れ州裡に往く知府相公不強へやんんと哭む
 幾度か状子と呈る由も知縣相公も已しとて敢て素未成人の命を太
 公の居宅と搜しんぬとて雷横人を救ひぬるを死す
 思ひ彼と嫌し門前不待しぬ素の事らに比れ入て押司に見え申比れ

を身と躲そに好と又た身と安んぶるに思はる人此審あると知て。
以不と搜コバ何と以て是と遮るらん兵官一々別小計を有又宋に
是と謝、そと於此の厚意派不身と没まを忘がじ我も已に以不と出て
何方にまうとも逃れんことを思ひつるも於此不救されせん必定縲綹の
恥と受へえん来いする僥倖も多う於此の憐れと憂る朱全が云何為
慙慙の云に及いせん惟あはば押目はいづれのもの身と倚んとい圖りあふ
そと宋に云我熟うれとあふあふと倚べき地三個あり第一は是滄州
横海郡の小徒風柴進が鎮之第二は是州清風寨の小李廣花榮が
処之第三は是白虎山の孔太公が家あり。比孔太公ハ二人の男子あり。婦男が
名ハ毛氏早孔明二男の名ハ独火是孔亮と。比兄弟の志ハ前年尚地不
ありて素小相見へり。比三箇の内何れの方に刻て好うんと躊躇未と交

顧再

せらる朱全が云け内何方へ成とも疾くんと決し今晚お立ぬ必ず
延引小夜で自ら強ち有ふと云れ宋に云来教に陸ひ今宵子速
落りて只官司のとい傳に於此と頼りえんる官一々發はる
べし有宿縁のありんと小全報緞帛等の物使有あは。忌諱あり又太
公ふれと索わぬ朱全が云。わろのとい。縲て来が身に干つて糸一
いん。必も心機と費しあへう。比只一刻もあく旅旅と完へ登り
又宋に云晚ふむて急にホまはもん於此益康健うて公役と勢之
縁縁ぞんば再会の如と。そとお款びやさんと。遂に刻と去て。只管
留意けに朱全と願て。毎の審の内へぞ花れる。朱全ハ比時彼板と
乃て審のハ小蓋し。於又卓と以て。そ上と壓へ。遂に鎮の門と穿て。此
く奔り出乃雷如。既不向て云る。ハ家内遍く搜し。そすと又も宋に

見えす。只宜しく宋太公を引て。縣裡に回せ。雷撲は言をめて暗小
 思ひ多。朱公の原。宋江と交り。を厚し。いんど及て太公と搦んとや
 け。三故。意顛倒して云に。疑ひあり。彼り。再びけ言を言は。我宜しく太
 公と焼して。一の情を。疑せ。と。多。乃朱全と共に。兵を。呼集め。そ
 多堂に。を。入し。む。宋太公は。時急に。酒食を。役けて。徳の人と。款待
 り。朱全。が。必ず。酒食を。使。わ。ふ。と。あ。れ。朱。意。亦。宋。江。と。燒。て。共に
 縣裡に。回。せ。雷。撲。が。云。宋。江。の。何。由。急。見。え。ぬ。也。太公。い。ま。も。朱
 事。を。命。じて。街。小。を。ぬ。彼。の。今日。の。強。勁。を。微。塵。も。知。り。す。ま。じ
 扱。宋。江。の。こ。の。朱。老。早。赶。逐。し。る。志。され。ば。我。為。る。他人。より。も。難
 味。し。那。厮。が。こ。の。於。て。の。朱。意。と。こ。の。め。に。已。に。前。夜。より。細。い
 る。公文。も。向。後。宋。江。の。身。の上。の。こ。の。於。て。の。言。と。あ。く。恐。と。あ。く。却。て

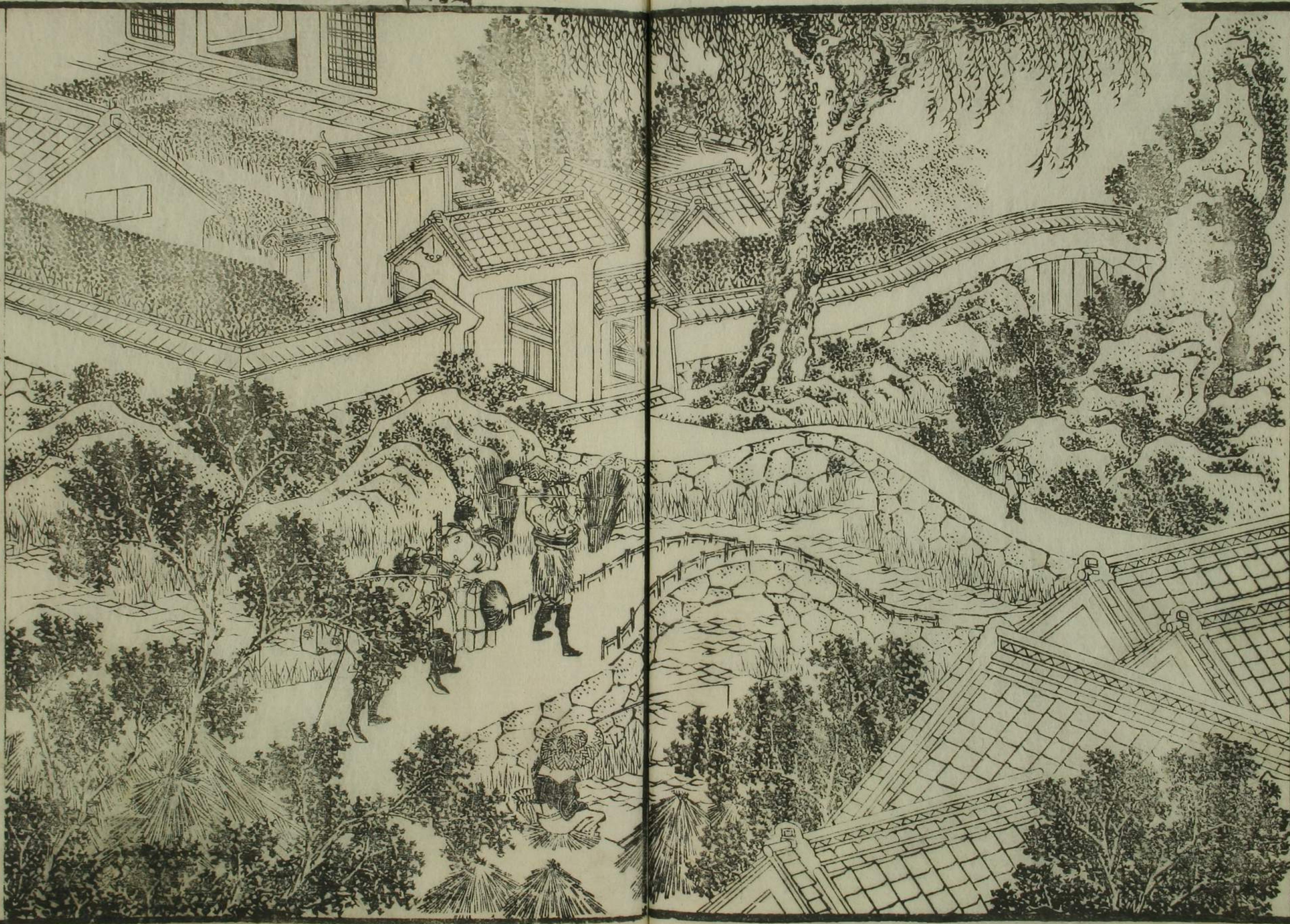
朱が。意。あ。ま。し。と。事。を。せ。分。明。に。書。載。あり。朱。全。が。云。太公。の。言。定。て。詐。い
 る。生。じ。られた。只。を。文。書。を。う。り。せ。親子。に。わ。げ。と。云。分。脱。を。ば。巴。不得。太
 公。宋。江。と。人。と。燒。て。縣。裡。に。引。往。致。す。若。強。く。せん。朱。知。縣。小。見。て
 述。ん。洞。や。雷。撲。これ。と。破。て。先。云。る。い。朱。知。須。く。我。の。よ。不。と。時。を
 宋。押。司。け。な。罪。と。死。され。る。と。云。必。定。脱。が。れ。て。あ。て。こそ。彼。婆。娘。と
 殺。され。し。ゆ。ん。ん。され。て。あ。ど。死。罪。に。交。り。し。ら。も。わ。る。は。太公。の。又。已。に。親
 子の。縁。と。引。わ。い。前。夜。の。印。と。押。れ。る。公文。を。取。持。あ。る。上。分。脱。又。立。さ。る
 中。も。わ。る。致。書。も。平。日。宋。押。司。と。交。り。厚。し。何。の。事。と。願。て。控。く。且
 太公。を。寄。し。ま。あ。る。せん。朱。全。是。と。愛。て。怒。ひ。り。り。我。は。是。雷。撲。が。疑。ん
 して。恐。れ。る。故。意。を。云。と。縣。裡。に。引。往。せん。と。云。つ。ら。雷。撲。及。て。此。の
 どの。懇。の。言。と。云。は。十分。の。意。い。へ。と。流。び。乃。ち。雷。撲。小。言。く。云。る。は。雷。知

既に初のとき建徳と馳しちんとす。尤も尤も定下の良議小
後へ、宋太公は一言を告げて大に悦び、深く支那に謝し、又酒食
と役けて二人の節度及び三四十人の兵を以て別して懸懸小款待乃
二錠者二十五和のの銀を以て出して支那に送りしを、支那に送る千
是を拜し交されば宋太公乃ち銀を分ち、法の兵を以て与へり。支那
既に執憑の公文を乞出してこれを一紙に写し、遂に宋太公小別れ再
ひ縣裏へゆり、乃ち知縣に見え、と詐て云る、宋太公家以て家
内希後た太通くあ次まで捜しつけれども、宋太公の文に見れば宋太公は
手病小犯されて且夕の命を危く、宋太公に前月より他出不出て未だ
同くは、是由念に只親子の絶の執憑の公文を写し、来りし、知縣が云
既にかくのどくまゝの公文を以て事と改改し、と只好近州隣郡

に觸て宋太公捕へし、と即日文書を書き、方く小一觸せど
あしふり、知縣裡の小系宋太公と親しく人々多り、多し、よくお
湊て再三再々に強を以て練と加へ必しも、聞老媽が為に挑唆せられ、下され
と示し、られ、強を以て強人の強を以て持たせ、遂に練小遊ひ、怒り、休
小り、宋太公自ら若干の鐵材を奏て、彼聞媽小与へて、必しも州裡小往て
訴る、とあるれ、とあるれ、然に老媽も頃日宋太公に缺用て酷く斃眉し、時
るし、鐵材を以て心中小毒ひ、容易に飲集せり、知縣系宋太公に、
知人、念源より、知に彼老媽遂に宋太公あつと、怒り、強を以て容ひ、是
縣裡に於て、哭訴あるとも、わづらひ、知縣、大いに、と毒ひ、別被
唐牛兒小罪と干け、控へ、二十棒と策て、城外、八百里外に逃放せり
彼宋太公、系而、姓の、り、る、の、い、ん、を、強、家、内、に、大、ひ、る、害、を、役、け、ぬ、や、と

宋押子
不序

宋押子
不序
人合到



竹編人許畫傳卷之二十一

新編一信畫傳卷之二十一

十

乃以宋の徽宗皇帝の時を以て官を以て易くして吏となれば
 難し。其子細官を以て後ハ其く皆奸佞の大兄木媚媚納給と執りて。
 官を以て小易し。宋の如く吏を以て押司の職を勤むる後ハ其く
 已か若くは其く。其職小就故に吏を以て難し。其氏別して汝州
 佐那の友府権威を猛りし由。凡押司以下の役人未縦ひ小過
 ころも第一これと犯す時ハ其知府知縣の心小合はるるを以て問を
 罪不めりて。其罰を被るる所ハ小宋の如く忍れて終らぬ。被
 害を役けて。不時の禍を脱れんと爲りぬ。又父母兄弟まで連累以
 義しめんとせぬ。乃数年以前に宋太公と友府小絶し。詐て宋の
 不孝と誣へしめ。親子の縁を断れ。刑被執憑の公文を乞交。遂に慮
 之。宋の時ハ汝州汝那小絶して。刑めく暗るる路を准依。其を拒めて多

かりしとや。日宋の如く又嘗て出て父を公父宋法と共小商議して云々
 ハ我向に若朱が如く救ひと義を乞ふ。終に縲紲の恥を徒ん小徹。小朱
 都政厚恩。骨髓に徹りて感激す。我今速に宋法と共に里を出る。
 難と免る。天多憫と垂る。必ず寛恩大赦の時。尙小遇て罪を免
 らん。之故に再び親子對面して遂家と安んじ。業を止む。然る恩及我
 乃に金銀を朱が如く家に送て。乃彼を親と交。又上下の役人未方
 極給とさす。又ハ金銀兼錢を圖老波の方へ送る。ひて。彼を再三
 友府に強んてと休し。其太公云。汝必以這三とを乞ひ。小絶はし
 され。我自ら乞ふ。乞ふと辨せん。汝は其父と復に及中。恙なく。其に流る。其
 其何れの取とも。其を安んじ。其書等と寄て。我憂を慰ふ。宋の
 其兄身人。其父の命と兼り。乃族給と調へて。汝事今ころし。其

丁丑月二十一日

十一

父子三人、鐵別留別の處と交へて、酒と酌、漸く父の鐘もは方小雲をた
 人者、稀くしと、宋江、宋江、已に旅のお扮と、僅くぬ、宋江、緑鮎の
 笠と、戴き、身に皂殺の衣と、着し、腰に紫線の條と、繫き、足ら、八搭
 の鞋と、穿ぬ、宋江、又、家人の袴、袖、お出し、背脊に包裹と、背、まて、
 宋江、宋江、在に、茶堂に、おて、父を、公と、おし、て、い、く、恩、父、自、ら、心
 と、慰め、おひ、て、必、事、く、と、と、お、て、苦、意、と、患、く、あ、く、く、太、公、云、汝
 二人、が、仍、向、八、青、山、茶、里、の、水、邊、お、れ、必、く、も、自、ら、身、を、惱、そ、と
 され、父子、三人、及び、家人、お、る、と、も、く、皆、酒、と、酒、を、さ、ら、る、る、り、り、
 古、酒、く、悲、い、生、別、離、く、悲、さ、い、や、く、と、も、斯、時、の、と、あ、り、ぬ、宋、江、未
 兄弟、二人、の、遂、に、父、を、公、に、別、れ、て、後、慣、ぬ、先、祖、の、遺、宅、と、踏、蹴、れ、故、の、
 雲、と、腦、後、に、願、て、密、函、の、書、と、眼、前、お、す、頻、りに、哀、と、ぞ、傳、り、り、り、

宋江、先、宋、江、に、高、嶽、し、て、云、る、に、我、等、今、何、れ、の、方、へ、投、べ、と、や、宋、江、が
 云、事、少、滄、州、横、海、郡、の、宋、大、友、人、の、刺、是、大、周、皇、帝、の、嫡、孫、と、
 参、れ、云、は、妻、人、之、况、や、は、人、を、と、奪、ん、だ、材、と、控、ん、だ、む、く、流、人、お、と
 救、ひ、お、や、之、昔、の、孟、嘗、君、の、好、ん、て、人、を、救、ひ、し、と、云、れ、も、又、多、く、宋、大、友
 人、に、賽、う、と、お、る、ゆ、に、我、い、ま、ご、對、面、お、せ、れ、れ、も、只、ま、は、く、彼、人、の、家、を、殺
 び、一、宋、江、云、我、も、老、子、彼、人、の、と、と、心、中、お、測、り、か、く、そ、お、ひ、ぬ、彼、人
 と、我、と、者、に、書、等、の、往、來、ハ、傳、う、と、云、れ、才、縁、熟、せ、ら、る、あ、や、未、對、面、と、遂、に
 亦、ひ、に、は、夜、の、彼、人、と、傳、ふ、ぜ、し、て、見、身、遂、小、高、嶽、と、交、し、亦、小、滄、州
 と、お、り、ん、て、を、參、り、

○横海郡に宋江客とぬむ

儲も宋江兄弟の夜ハ酒り。曉れを山に登り。水と渡り。城下と控へて。

強て酒磁研に及べり形くハ盆と收り多ク宋進が云今響くの夜飲を
 嬉と云して乃宴と換盆と更めて酒又數巡に及りしる夜も初更小進づ
 つて。漸鏡の整耳に真ぬけ時宋江起て淨子に召んしは宋を壯しく一
 人の家僕小燈と提さきて宋の廊下の及改まる前に居せ家僕客を引
 て前面の廊を繞り出て行る所に宋江已に七八分の碎のりて。脚步稍
 振るるに形知れ一人の大漢子瘡を患で廊下の辺にありしが柄附の
 火盆に火を多く投けて。回烘居ぬ。比時宋江は人を着しうども火盆に柄
 めるとぞ知ずして不安かの火盆の柄と踏られ忽ち掀翻て火をく彼
 大漢子が面上に飛散る。比時彼大漢子大死に該と猛統一身小汗と世。
 瘡の抖止し一が是よりま病竟に治しぬ。是より彼大漢子大お怒り
 急に宋江が衣の襟と揪へて吼罵て云るハ汝何奴られ殺て來て我を

弄戲宋江も火盆と踏翻しうと見て口ぐ大に讀ま更にそ分脱べん
 が死に彼燈と提さ家人も忙しく彼漢子小向ひに客は我を人のま
 第一の上賓之今火盆と踏翻し一歩ハ本火盆小へあるとぞ知りぬる
 放るれば必も以客にさして吾乳とさしあふ。彼漢子が云汝一向彼と上賓
 と云我來也初ハ肉巻つて我と上賓と稱しぬ。彼は宋大友人頃日我
 と別て疎んぜり後中も人千日好とあく花百日好ると云し。も實最
 理あり。我今以若に面と焼れ豈よくこれと思んやとて已に拳と巻て宋江
 とおんとせり。彼家人も多ふ。これと勅解とて稍用しうるに勿ち一個
 の人あ三人に燈籠と提さ飛ぶとくに馳来る。是刻宋進之宋江ふんて
 云るハ押司何由名ひ死に立て。爾有ハ彼家人先宋江が火盆と踏翻し
 ころ。次第とるれば宋進呼てくくとお喚ひ彼大漢子にさしと云るハ汝

武松柴進が宅ゆて
宋江小肇て面會以



武松柴進が宅ゆて

十五

以名言と押司いふと感徳さるるや。彼大漢子云。天下に押司より若き
 多きこと斗とせし量んをさうに我はは商つううくの辺境に地を祇めて
 名と知らざるふあさの鄆城縣の押司宋公明のそと。比若の何玉の押司より
 ともいふんぞ宋押司の方より及ん。宋進益候て汝果して宋押司と感
 徳するや。彼大漢子が云。未ださき面の感だれも。世上の人彼とせよ。及時と
 稱は。そのま。我を名とせよと久し。既や宋公明いごとせんと。彼と經
 ん。若し人の危きを授け。人の困らんとす。ひや。是乃天下小くれると。英雄
 あり。ひんと除て。べふ。尚せまうと。押司ありと。とふ。宋を云。汝も小の
 好處を以て宋押司と天の英雄と。もや。彼漢子が云。宋押司の好。而豈
 すと。これと。うら。つ。これと。えん。宋公明の且。是。仁と。る。小。そ。危。あり。ご。と。る。は
 小。路。終。り。彼。小。商。せ。第一の君子と。我。今。病。の。瘡。と。待。て。傍。ひ。り。ん。と。欲。

宋進が云。汝今宋押司小見え。と思ふ。や。彼漢子が云。ま。え。これ。と。ん
 最。方。寸。に。通。り。葉。進。は。時。宋。公。明。と。指。さ。し。て。彼。漢。子。に。告。げ。云。ま。く。は
 刻。十。万。八。子。軍。近。く。列。眼。前。に。あり。彼。及。時。而。宋。公。明。は。彼。押。司。の。と。こ
 彼。大。漢。子。が。云。實。に。是。使。ら。宋。公。明。も。我。い。ま。と。於。此。に。是。宋。公。明。が。云。未
 乃。ち。宋。公。明。之。言。下。何。由。急。集。ご。と。新。吹。嘘。し。や。や。彼。大。漢。子。是。と。彼
 て。乃。晴。と。定。り。て。良。久。く。宋。公。明。と。お。り。ん。で。長。う。り。る。が。忽。ち。地。上。に。拍。快
 て。云。る。は。今。日。い。る。る。吉。日。也。て。押。司。と。稱。さ。る。や。却。て。着。つ。と。疑。ね。ぬ。宋。公
 が。云。未。何。の。言。ひ。に。新。皇。下。の。聖。敬。と。被。る。ぞ。や。彼。大。漢。子。が。云。未。先。に。押。司
 と。感。徳。さ。し。て。多。く。吾。れ。と。り。ぬ。然。れ。は。廣。く。是。を。怒。し。や。ん。と。て。拜。ひ。地。を
 跪。づ。く。宋。公。明。は。投。起。し。て。云。皇。下。の。言。姓。大。名。い。ん。葉。進。が。云。人
 は。是。汝。河。縣。の。人。之。姓。は。武。名。松。と。耳。す。葉。が。家。に。還。返。せ。し。と。て。凡。一。年

酒宴と役け愛侍り。毎日かくのどして。幾日もさしられも宋に自
 着千の浪と武松に与へて。衣被と個一りんとせし。ふは宋進これと咬て
 毒之毒にを浪と宋にに還し。不述一櫃の假子花袖縞紗ホと出出。
 家尼の針工不命じて。客之人の衣被と縫しあり。頃日宋進が武松と
 十分をせざるい。ゆるれ。京武松が初め。あし時。射交さく。款待られせを
 後。武松慢に酒と飲で。初不効。碎狂とほ。櫃に春と下りて。家人を
 歩ら。甲乙一家中の後僕ホ。そく。武松と嫌ひ。毎日宋進が茶にむて。伴
 う。武松が不行跡と告。ふは宋をこれと夢て。殆収に。漸を官待。慢りぬ
 狂れ。さび度宋のまど。武松と覺し。朔夕一雨に在て。酒と砂。夢と狂り
 心。情も。れ。お合ひ。られ。武松も。と。れ。と。感。し。を。後。の。骨。て。撒。酒。風。を。さ。も
 あく。只。懸。懸。に。宋。に。う。た。在。不。侍。り。後。は。時。宋。を。と。初。と。信。の。家。人。を

武松が性と改め。公の流と申す。と。各。考。吳。の。思。ひ。と。借。り。既。う。て
 才。月。館。り。さ。し。る。武。松。の。故。園。の。情。切。に。し。て。忠。に。清。河。縣。に。回。り。兄。と。侍。り。ん。と
 弟。の。知。に。宋。進。宋。に。再。見。是。と。留。め。られ。武。松。が。云。来。加。人。と。去。さ。り。う。り。弟
 久。く。兄。の。消。息。と。變。は。是。故。に。一。回。取。て。兄。と。探。望。と。思。ふ。と。契。り。之。形。を
 明。く。不。是。と。弄。ふ。一。交。宋。に。云。是。下。実。に。かく。わ。く。最。後。が。は。吳。日。の。帳。と
 如。の。再。び。来。て。弟。を。と。せ。し。武。松。が。夢。て。深。く。感。謝。に。宋。を。又。若。干。の。金
 銀。と。武。松。に。与。へ。弟。の。費。に。當。り。られ。武。松。厚。謝。し。て。い。さ。く。流。に。之。友。人。の。忠
 と。義。を。し。て。幸。甚。と。して。公。不。認。し。骨。小。鏤。工。の。之。を。取。酒。宴。と。役。け。宋。に。兄
 才。と。傳。に。武。松。小。酒。と。勅。め。別。れ。と。惜。り。り。翌。日。武。松。旅。装。を。扮。し。已。に。宋。に
 葉。進。に。別。れ。告。げ。られ。宋。進。又。起。身。と。祝。し。て。飲。砂。を。傳。し。乃。ち。一。飲。の。紅。綢
 の。襖。子。と。送。て。武。松。に。着。せ。し。武。松。是。を。謝。し。白。丁。て。遂。に。別。れ。出。られ。宋。進

新編水滸畫傳卷之二十

宋に宋法も共に門外に出るお送るは時宋に一包の銀と武松に与へて去
 るは是之少の薄儀とれども御心で餞別の儀と表は只官くこれと笑納
 せし武松れんて再三大に感謝してお收せり宋は別宋進に對
 て云々の我今武松と送て後はお出べさた大友人官く館に在て病更
 小刻回リヤさんと宋は兄弟遂に又六里送り別く武松か云飛くハ押司
 ハ是より回りの葉大友人候待久く思ひあつん宋は云狂哉おくの後
 を送て別れしと再び閑話とすつ後をゆれば又二三里許馳去
 る武松は時係く急くと宋は子と携て云々の押司只願遠く送ら
 ことある後にも君を送ると千里後に須く一別すべと云れ何あり只官く
 此知小終て別れり也宋は是と夢て乃ち對面の村と指ぎて云彼所に
 幸ひ酒店あり我尚彼酒店まで送る官く汝に勅めて更に三杯の酒と尽
 すべと三人又と携て遂に酒店にあり各席と求めて坐しければ酒肆
 の厨僕まの茶と持てぬれ宋法先僕に命して云々の汝速に酒肉と役
 來れ我僕これと夢てお送酒肴を具乃ち三人と送て酒席に控りわ
 宋はホ三人酒席に移り已に飲めと催して各陽関の感に務ざりぬ漸日
 も美昏小おし武松が云天色已に晚るに押司愈茶と弁おんぞんた
 幸ひ今宋が八杯と清まひて義と結ひ盟と誓ひ乃兄弟の約と定めては
 より後く別れり也宋は是と夢て大ひに怪び馬時兄弟の契と結ん武松
 ハ狼狐更小なり宋は又一錠十枚の朱提と武松に送る武松再三釋
 云々の長兄も何と旅泊の事なれ自ら今銀と用ひおん所多う人に宋
 敢て是を奪更せんや宋は云汝必ず斯等のことと思ひ慮つては朱提と釋
 ばらんとするれ美果く是と釋するにわが我變て兄弟の盟と約は武松

今六拜よりと徳をばお射して手解と交ふなり。宋法再び酒肆の厨小
 同て乃ち酒肉の價を僕ひ三人ひとく酒肆の門外小世に武松只願液
 と酒を宋に兄弟小別れ給うた方へと懸さなり。宋に宋法酒肆の
 門前に立寄り、急ぐとして遙小武松が形の見へざるまで歩座を兄弟再び
 身を回し、宋をが鼓に急ぎさるや又六里を歩座に宋大友人の交への
 家僕に二疋の馬を牽せ自らも馬に乗て直に武松に馳て出逢ふ。宋氏兄
 弟をば見て大に怪む各響を並べてお急。宋大友人の鼓にゆり、又武松
 各に立別れて後を夜二十里と馳て旅庵に歇り、翌日又子天に旅庵
 とお立寄す。心中におひかる天下の人宋公明のよき人と救ふを及
 及と稱し、乃ち寔にを稱す。正に救ひに這旅の大丈夫と兄弟の盟と
 約し、宋大友人と急ぐと馳て限る。已に十餘日と馳て陽谷縣の地か

刻り、午の刻をり、乃ち下り縣裡へ尚遠く、先酒舎を求て
 飢渴を充んと欲し、酒肆を尋て徘徊し、乃ち對面の方に一物
 の酒肴を、門前小根の籠と、さつの大文字あり。三碗不遇、固と又字
 ありなり。

武松は酒肆へ入て大酒、乃ち先途中猛虎小遇て、勇力と破し、吼虎
 と闘ひ、竟に歩殺す。乃ち兄弟大所を妻密吏と合辨し、武大所を毒殺
 する由急、嫂をひに奉に、笑る者、悉く害し、并に武松が路、雪行
 け、次三編目の内小要し、出

新編水滸画傳卷之貳拾肆

二編之尾

和漢
西洋
書籍
賣捌處

大阪心齋橋博勞町角

群玉堂河内屋
岡田茂兵衛

